

# 坂口謹一郎先生とユキツバキ

萩屋 薫

暮もおしつまった昨年の12月9日、坂口謹一郎先生が亡くなられた。先生は旧高田市のご出身で醸造学、醱酵学の世界的権威であり、文化勲章の他数々の賞を受けておられるが、清酒王国の新潟では、酒博士として一般にもなじみが深く、私も昔ベストセラーになっていた、岩波新書の「世界の酒」「日本の酒」を愛読したものである。

出会いというものは不思議なもので、こんな大先生と親しくおつき合いをさせていただけるようになったのは、ユキツバキが取り持つ縁であった。そして先生からユキツバキのことだけでなく、東西の酒の話、チーズを始めとする欧米の食文化、文学、書画骨董、焼物に至るまで、巾広い分野のお話をお聞きすることができ、それこそ目から鱗が落ちたように、広い分野にわたり好奇心の目を開かせていただいた。

先生は戦時中、中頸城郡頸城村鶴之木に研究室ごと疎開しておられた際、譲り受けた30坪程の民家と600坪程の屋敷を改造されて楽縫庵と名付け、春秋ここに滞在して、地元の文化人らとの交流の場としておられ、私もその仲間に入れていただいた。

この楽縫庵という名はミノムシが木の葉を縫い合わせてその中で楽々と過ごすという意味で、ここにくると自然がいっぱいで、心安らかに過ごせるという意味なんだと説明して下さった。それだけに先生はこの広いお庭を愛して何か郷土の為に役立てたいと願っておられたようであった。

先生がユキツバキに関心を持たれるようになったのは次のようないきさつがあったという。先生は武田薬品工業の創業者、先代の武田長兵衛氏と親交があってユキツバキの話聞いたからである。武田氏は趣味でランの栽培をしておられたが、戦後間もない頃渡米された時、ある財界人の会合で自慢話をしたら、「貴方がいくら自慢しても我々のコレクションにはかなわないだろう。それよりなぜ日本原産のツバキを集めないのか。特に最近発見されたユキツバキはすばらしいツバキだというのが」と言われグウの音もでなかった。それで帰国早々重役連中にユキツバキのことを尋ねたが、誰も返事ができず、唯一人プラントハンターとして知られている村上出身の富樫誠さんが良く知っているということで、早速、収集を命ぜられ、一乗寺の武田薬品の薬草園にはこうして集められたユキツバキの見本園ができた。私もその頃津川周辺で富樫さんとお会いしたことがあり、坂口先生もそのとき郷土にそんな貴重なツバキが分布していることを知ったということであった。

一方私がユキツバキの調査研究を始めたのは1953年鹿児島大学から新潟に転任して来て、雪深い新潟の山野にもツバキがぐ群生し、それが従来の暖地性のヤブツバキと異なるユキツバキであることを知ったからである。その当時お茶の水大学の津山尚教授もユキツバキの調査研究を始めておられ、アメリカの植物資源導入局のクリーチ博士も、新潟からユキツバキを採集して、本国に送っていた。しかし園芸学的にはまだその実態や価値はあまりわかっていなかったもので、野生種と園芸種の調査からとりかかった。そんな時に私の研究室に専攻学生として入ってきたのが相棒の石沢進氏であった。彼は暖地育ちの私とは対比的に長野の雪深い山国育ちで、山歩きと植物が大好きで持前の旺盛な体力気力で県内をくまなく調査して廻った他、近隣のユキツバキも調べ上げた。彼は分教場の宿直室やお宮の縁の下に泊めてもらったこともあったようで、特大のリュックサックに新聞紙とビニール袋と寝袋をつめ込んで出かけては、山のような標本と挿し穂をかついで帰ってくるのが常であった。ツバキの挿し木は普通6〜7月が適期であるが、ユキツバキは発根し易いので、4月の開花期に挿し木をしてもよく発根する。こうして花を調査すると同時に苗作りもでき、急速に観賞価値の高い品種の収集ができたのである。そして1960年頃にはほぼ調査結果がまとまり1500程の品種が集まり、学内に品種見本園を造成することができた。

ユキツバキの興味ある特性の一つに花が落ち難いという性質がある。ツバキは普通花がボトリと落ちるので不吉な花だという迷信もあるぐらいであるからこのユキツバキの特性は実用的に価値が高い。それが発見されたのは1964年、新潟で国民体育大会が開催された時のことである。天皇皇后両陛下が新潟大学にもご来臨になられることになり、その時にユキツバキについてご進講申し上げるようにとのお話があった。せっかくの機会なのでユキツバキの実物の花をご覧にいられてご説明申し上げたいと考えたのであるが、6月7日まで開花期を遅延させることは至難の業であった。それで知恵をしぼって蕾のついた切枝をビニール袋に包み、-3°Cの冷蔵庫に貯蔵して、それを予定日の一週間前に室温にもどして、百近いユキツバキの品種の花をピタリ満開にして御覧にいろることができた。この時同時にヤブツバキの品種も同じ方法で貯蔵したが、こちらは皆蕾が落ちてしまい明瞭な差を示した。ユキツバキの花が落ちにくいという性質はその後、京都伏見桃山にユキツバキの血を引いた特別な切花用品種が室町時代から栽培され、関西の花市